

## 第11回「ハンガリー旅の思い出」2014年コンテスト作品

中嶋恵子さんの作品

### ブダペストを旅して

#### 旅の始まり

成田からモスクワ経由で15時間、ブダペストに到着した。  
8月の日本は暑かったが、ここもなかなか暑い。  
そして夜の7時すぎだというのに明るい。  
初めての個人旅行となるこの旅は、ブダペストに暮らす友人を頼ってのものである。  
テーマは「暮らすように旅する」。

#### ブダペストの交通機関

市内を走るトラム、市バス、地下鉄が「72時間ブダペストカード」で乗り放題である。  
改札などはなく、どこからでも自由に乗って自由に降りる。ドナウ川を渡る船もこのカードで乗ることができる。  
綺麗な黄色のトラムは、街中を見渡しながらか進む。また、ドナウ川沿いを走る路線もあり、すぐにお気に入りとなった。難点は、エアコンがついていない車両が殆どであるため暑いこと。だが、それも窓から入ってくる街の香がする風で帳消しだ。

#### アンドラーシ通り

宿泊先のアパートメントがあるアンドラーシ通りは、しっとりした緑豊かな美しい通りである。  
歴史を感じさせる重厚な石造りの建物に挟まれた歩道にベンチが並ぶ。  
朝早く、暗いうちからジョギングをする人がいる。また、英雄広場、市民公園へ続くこの通りには犬を連れて来た人も多い。ブダペストでは大きい犬でも離して散歩するそうだ。お行儀がよく、見知らぬ旅人の好機の視線なんぞには動じない。  
ゆったりとマイペース、人も犬も自分の生活を楽しんでいる。

#### 市場

活気あふれる中央市場は朝6時から開いている。  
2階建ての市場の1階には食料品、2階にはテーブルクロスなどの工芸品の店がぎっしり並ぶ。  
圧巻は野菜や果物の種類の多さである。特産のパプリカは赤、黄、緑、白など色もとどり、形も長いものから丸いものまで今まで見たことのないバリエーションだ。セロリの根(芋?)は初めてみた。食感は芋だが味はセロリだ。  
小規模の市場も楽しい。週に一度搾りたての牛乳を売りに来るそうだ。ペットボトルを持っていくとそれに入れてくれるとか。残念ながら、出会えなかったが。  
市場の魅力は何といっても安いことであるが、店の主人とひと言交わしながらの買い物は暮らしの原点である。  
兎にも角にも理屈抜きでテンションが上がる場所だ。



中央市場

聖イシュトヴァーン大聖堂

ここは観光地ではない。聖なる場所だと感じる。

ドーム天井の荘厳さ。頭の上から降り注ぐ光の恵みに自然と頭を垂れる。360度全方位からの祝福に身を委ねる。

聖堂の外はまるでローマの休日のような広場である。お目当てのバラのアイスの列に並ぶ。選んだ4種類のアイスがバラのように盛り付けられ、それはそれはハッピーな気分させてくれるのである。



聖イシュトヴァーン大聖堂

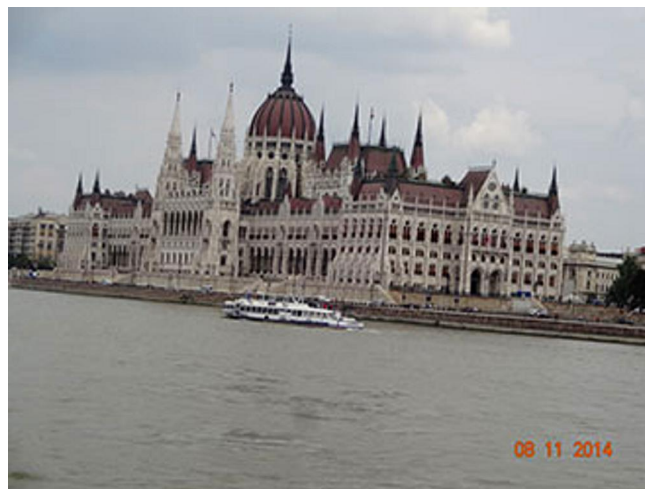


バラのアイス

## ドナウ川

今回一番訪れたかった場所。「美しき蒼きドナウ」、「ドナウ川のさざなみ」を出発前に毎日聴いてイメージを膨らませてきた。

昼のドナウは想像よりもずっと力強い川だった。ほとりの建物、そして、いくつもの橋とのコンビネーションが良い。この川を中心に街ができたのだろうか。



昼のドナウ

夜のドナウは幻想的だ。王宮の丘から見るドナウの川面にライトアップされた国会議事堂が映る。なんといってもくさり橋の美しさ。くさりというより真珠のネックレスのようだ。

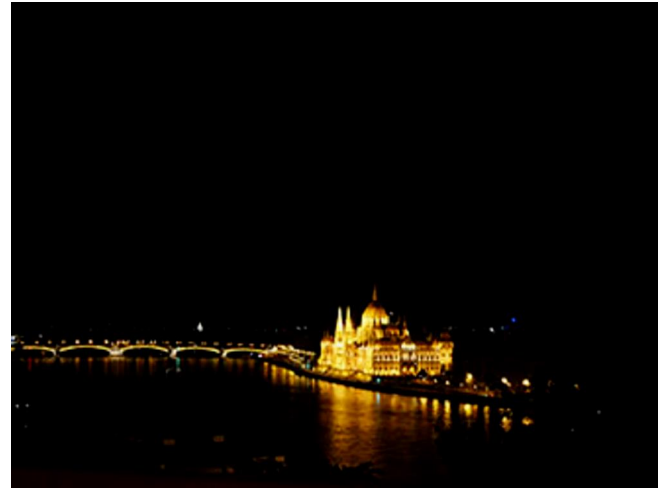
そういえば、ブダペストは「ドナウの真珠」と呼ばれていたのだったか。キラキラと輝くその街は「ドナウの宝石箱」だった。ドナウとそこに溶け込んだ夜景を居ながら、このままじっと時が止まるのを祈る。



伝説の鳥



夜のくさり橋



夜のドナウ

### そしてハンガリアン

最初の印象は無表情でこわい。

だが、地下鉄の検札官に手を振ると、はにかんだ笑みを浮かべて振り返ってくれた。温泉横のビールバーでは、たまたま隣に座ったビジネスマンがビールの買い方やおいしいビールを教えてくれた。クルーズ船の船長はもやいの解かれた船をもう一度船着き場に戻して乗せてくれた。

また、一見不愛想な市場の女性が、手早く野菜を量って売りさばく姿も印象的だ。外国人や年配の客がもたついても決していらいらした態度はとらないのも市場でよく見る光景だった。無表情の下にはホスピタリティーが溢れているのだろう。

そして、殆どの方が英語を話せる。自らをマジャールと言わずハンガリアンという。この国の歴史について思いをはせる瞬間でもあった。

### 旅の終わり

ブダペストでの滞在は実質3日間ではあったが「暮らすように旅したい」という思いそのままにブダペストの中心を歩きまわった。そして、すっかりこの街の虜になってしまった。

帰国後1か月以上経った今でもまだ夢の中にいるようだ。

ブダペストはもう秋だろうか。

様々な季節のブダペスト、そしてハンガリーの郊外を旅する夢の続きを見ている。